

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00690

研究課題名(和文) 英語tough構文とその関連構文の通時的・共時的研究

研究課題名(英文) A Diachronic and Synchronic Study of English Tough Constructions and Relevant Constructions

研究代表者

久米 祐介 (Kume, Yusuke)

名城大学・法学部・准教授

研究者番号：40645173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、tough構文と関連構文(中間構文や疑似受動文など)の特徴、すなわち表層の主語が述語内の目的語として解釈される現象について、通時的に調査、分析し、これらの構文の統語的・意味的变化を明らかにしたうえで、生成文法の理論的枠組みで原理的説明を試みた。具体的には、古英語におけるtough構文の派生について、不定詞句内からの名詞句のA移動は理論的に妥当かどうかを検証する前に、まず、同じA移動で派生していると考えられる疑似受動文の通時的発達について調査し、現代英語における疑似受動文の統語的・意味的特徴について経験的証拠に基づく理論的説明を与えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

tough構文や疑似受動文、中間構文などは主に個別の構文として研究されてきたが、本研究ではこれらの構文の統語的・意味的特徴に関連性を見出し、それぞれの構文が英語史においてどのように変化してきたのか、構文横断的に観察、分析を試みた。先行研究では、古英語のtough構文はA移動で派生しており、中英語以降にAバー移動で派生するようになったと主張されているが、その根拠ははまだ明確ではない。本研究では疑似受動文の派生が、A移動から移動を含まないIPROの認可に変化する分析を提案した。今後の研究では、このような移動を含まない派生がtough構文にも適用されるのかを検証する。

研究成果の概要(英文)：This research discussed the historical development of the tough construction and relevant constructions (the middle construction and the pseudo passive construction), in which surface subjects are interpreted as the object in the predicate, and tried to clarify their syntactic and semantic properties within the framework of generative grammar. More precisely, before verifying the validity of A movement of NP from the infinitive clause to the subject position in the tough construction in OE, I conducted a diachronic research of the pseudo passive construction, which we assume involves A movement in the syntactic derivation, and gave a theoretical assumption based on empirical facts to the syntactic and semantic properties of the pseudo passive observed in Present-day English.

研究分野：史的統語論

キーワード：疑似受動文 tough構文 生成文法 言語変化 史的統語論

1. 研究開始当初の背景

本研究が扱う tough 構文、疑似受動文、中間構文では表層に現れる主語は、不定詞節、前置詞、語彙的使役動詞の目的語として解釈され、これらの構文にはそれぞれ特殊な振る舞いが観察される一方で、主語の特性や属性を叙述した構文であるという共通点がある。これらの統語と意味はそれぞれ別の文脈で研究が進んでおり、両者を関連付ける研究は少ない。また、これらの構文は主に共時的に分析されており、通時的な分析は多くなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は tough 構文、疑似受動文、中間構文のように述語内で目的語と解釈される要素が主語として現れ、その主語の特性や属性が残余部分である述語によって叙述される構文の意味がどのような統語構造によって生じるのかを明らかにし、各構文に観察される意味的・統語的特徴をその統語構造によって説明することを目的とする。

また、歴史コーパスを用いて、これらの構文のデータを収集し、これらの構文がどのように発達し、どのような構造変化を経て現代英語における振る舞いを示すようになったのかを明らかにする。

3. 研究の方法

先行研究で観察された各構文の共時的振る舞いをまとめ、その理論的な分析の問題点を指摘しつつ、いくつかの仮定を採用しつつ修正を行う。歴史コーパス(古英語: Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Frank Beths (2003), The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE), 中英語: Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition (PPCME2), 初期近代英語: Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Lauren Delfs (2004), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME), 後期近代英語: Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Ariel Diertani. (2016), Penn Parsed Corpus of Modern British English, Second Edition (PPCMBE2))を用いて、関連構文のデータを収集する。収集したデータを分析し、それぞれの変化の過程を明らかにして、現代英語における各構文の振る舞いに説明を与える。

4. 研究成果

Fischer (2000)などは、古英語では wh 疑問文に前置詞残置がみられるのにもかかわらず tough 構文では前置詞残置は許されなかったと観察している。その観察から、tough 構文は A 移動によって派生していたが、中英語になると前置詞残置を含む tough 構文が観察されるようになったため、空演算子の \hat{A} 移動を含む派生に変化したと述べている。特に、(1)のような疑似受動文との対比を \hat{A} 移動の根拠としている。

(1) a. This gospel is easy to gain heaven by.

b. *This can be gained heaven by.

A 移動によって派生する(1b)の疑似受動文が非文であることから、A 移動によって前置詞の補部を抜き出すことができないと仮定し、(1a)の tough 構文は \hat{A} 移動を含んだ派生であると述べている。しかし、問題はそう単純ではない。tough 構文と疑似受動文の両方において、文法性を決定づける重要な要因として高見(1997)は特徴づけという概念を提案している。

(2) a. *Winter is impossible to climb Mt. Fuji in.

b. He has been burned, stuck pins in, beheaded..

(2)は(1)と真逆の文法性を示している。高見によれば、tough 構文でも疑似受動文でも主語がそれ以外の部分によって特徴づけられているかどうか文法性を決定する。したがって、(1a)が文法的で(1b)が非文法的であるのは、単に移動の種類によるものではないということになる。本研究では、tough 構文の \hat{A} 移動もしくは A 移動による派生、あるいは移動を含まない派生の可能性を論じる前に、疑似受動文の現代英語における振る舞いを観察し、その歴史的発達過程を明らかにしたうえで構造変化を分析し、A 移動による派生と A 移動を含まない PRO の認可による派生を提案した。

疑似受動文を以下の2つのタイプに分類したうえで、(4)と(5)の制約に従うと仮定する。

(3) a. This question will be dealt with later in the book. (前置詞句動詞タイプ)

b. This bridge has been walked under by generations of lovers. (前置詞句タイプ)

(4) インヴォルブメント制約

英語の受身文が適格となるのは、能動文において、その他動詞が表す行為や状態に目的語がインヴォルブ(関与)している場合、言い換えれば、他動詞が表す行為や状態によって、目的語に何かがなされたという事が示されている場合である。

(5) 特徴づけ制約

英語の受身文は、主語がその受身文によって特徴づけられている場合に適格となる。

前置詞句動詞タイプでは前置詞は動詞とより強く結びつき句動詞を形成し、インヴォルブメント制約に従っている。すなわち、This question は deal with の直接対象であり、その行為にインヴォルブしているので、This question に対して何かがなされると解釈される。前置詞句タイプでは前置詞は表層主語とより強く結びつき前置詞句を形成し、this bridge は walk の直接対象ではなく、walk の表す行為にインヴォルブしていない(橋の上を歩くのではなく橋の下をくぐると解釈される)ので、(2)のインヴォルブメント制約は満たしていない。しかし、(1b)は何世代もの恋人たちがその橋の下を歩くことによって他の橋とは異なるものと認識されていると解釈され、特徴づけ制約を満たしているといえる。

以上の仮定を基に、中英語の疑似受動文については、Dreschler (2015)に従って、動詞と前置詞の再分析に派生したと仮定する。具体的には、関係詞化に伴う前置詞残置が関係詞節内の受動化に伴う前置詞残置に拡張したことが疑似受動文の派生の要因の1つであり、古英語における完了と受動の解釈のあいまい性がこの変化の素地となった。14世紀半ばに動詞と前置詞が融合したことによって疑似受動文が発達したというDreschlerの分析が正しければ、彼が挙げている疑似受動文の動詞と前置詞の組み合わせパターンは、すべて動詞と前置詞の結びつきが強い前置詞句動詞タイプの疑似受動文であるということになる。したがって、前置詞が目的語と結びつく前置詞句タイプの疑似受動文は初期近代英語以降に発達したと考えられる。

本研究では、PPCEMEを用いた調査結果に基づき初期近代英語における疑似受動文の頻度と動詞と前置詞の組み合わせパターンのバリエーションの推移を調査した。Dreschlerが示したように、中英語では疑似受動文の事例は数が少なく、動詞と前置詞の組み合わせのパターンも限られていたが、初期近代英語になると疑似受動文の事例数が増加し、動詞と前置詞の組み合わせパターンも豊富になっていった。Dreschlerに従えば、疑似受動文の成立は14世紀半ばである。したがって、ここではM1とM2を除いたPPCME2の総語数に対する疑似受動文の事例数とその割合を表1に示す。同様に、PPCEMEの総語数に対する疑似受動文の事例数の割合を表2に示す。表1と表2を比較すると、中英語M1-M2の疑似受動文の頻度は1万語あたり0.066とかなり低く、初期近代英語になるとE1で1万語あたり1.339、E2で2.578、E3で3.305と時代を経るごとに飛躍的に頻度が増していることがわかる。この頻度の増加に伴い動詞と前置詞の組み合わせパターンも増加している。表3に示すように、M3-M4の疑似受動文の動詞と前置詞の組み合わせは34パターンであった。これに対して、初期近代英語のパターンはE1で38パターン、E2で85パターン、E3で92パターン見つかった。

表1：PPCME2における疑似受動文の事例数と割合

時代	疑似受動文の事例数	総語数	10000語あたりの割合
M3-M4	54	816104	0.066

表2：PPCEMEにおける疑似受動文の事例数と割合

時代	疑似受動文の事例数	総語数	10000語あたりの割合
E1	76	567795	1.339
E2	162	628463	2.578
E3	179	541595	3.305

表3：PPCME2とPPCEMEにおける疑似受動文の動詞と前置詞の組み合わせパターン数

時代	動詞と前置詞の組み合わせパターン数
M3-M4	34
E1	38
E2	85
E3	92

M3-M4とE1にはパターン数に大きな差はみられないが、E2からバリエーションに大きな増加がみられる。表2と表3で示した疑似受動文の生起数の増加と表4で示した動詞と前置詞の組み合わせパターンの増加により、(6)のような前置詞が動詞と結びつき前置詞句動詞を形成するのか、前置詞が意味上の目的語すなわち表層の主語と結びつき前置詞句を形成するのかあいま

いな事例がみられるようになる。

(6) and here was *sat upon* at Westminster in the Parliament-Chamber.

(THOWARD2-E2-P1,1,89.216)

このような事例は、動詞と場所を表す前置詞のパターンでインヴォルブメント制約と特徴づけ制約のそれぞれを満たす解釈が可能である。すなわち、here という場所が sat upon という行為によって何かがなされたと解釈されればインヴォルブメント制約を満たし、here が受け身部分によって叙述されていると解釈されれば特徴付け制約を満たす。したがって、中英語に動詞と前置詞が融合することにより出現した前置詞句動詞タイプの疑似受動文は、初期近代英語でその頻度と動詞と前置詞の組み合わせパターンが増加したことより、前置詞が動詞と結びつくのか前置詞が意味上の目的語すなわち表層の主語結びつくのかあいまいとなり、前置詞句タイプの疑似受動文が発達したと考えられる。さらに、前置詞が動詞と結びつき前置詞句動詞を形成しているとは解釈されない事例もみつかった。そのうちの1例を(7)に示す。

(7) This place is wonderful *dikid about* (LELAND-E1-P2,120.347)

この前置詞は動詞と結びついて前置詞句動詞を形成しておらず、前置詞は意味上の目的語すなわち表層の主語と結びついている。deal with のような前置詞句動詞は前置詞とそれに後続する名詞句が構成素をなさないが、これらの事例では前置詞は明らかに文の主語と構成素をなしていると解釈される。そして、これらの主語は動詞の行為や状態の直接対象ではなく、インヴォルブメント制約を満たしていない。その一方で、どの事例の主語もその属性や性質が叙述されており、特徴づけ制約を満たしていると考えられる。具体的には、堤防が築かれているのは This place の周囲であるため表層主語の This place は dikid が表す行為の直接対象ではなく、その行為にインヴォルブしているのではない。むしろ周囲が堤防で囲われているという主語の性質を叙述していると解釈される。

中英語に出現した前置詞句動詞タイプの疑似受動文から初期近代英語に派生した前置詞句タイプの疑似受動文の統語的变化を示す。中英語に動詞と前置詞が融合し句動詞を形成するようになった結果、魏前置詞句動詞タイプの疑似受動文が出現したという Dreschler の分析に基づき、前置詞句動詞タイプの疑似受動文は(8)の構造を持つと仮定する。

(8) [TP Subj_i [T be [_{vP} v [_{vP} V+P t_i]]]]

(8)では、VはPと融合し前置詞句動詞を形成している。補部DPはV+Pの前置詞句動詞からθ役が付与されるが、vは外項を欠くため対格は付与されず、TP指定部へ移動し主格が付与される。前置詞句動詞タイプの疑似受動文にインヴォルブメント制約が課されるのは、前置詞句動詞が補部DPにθ役を付与し、そのDPがV+Pの表す行為や状態の直接対象になるからだと考えられる。

初期近代英語になると疑似受動文の頻度が増し、動詞と前置詞句の組み合わせパターンのバリエーションも増加する。これにともない、前置詞句動詞句タイプの疑似受動文に再分析が生じ、(9)に示すように叙述を表す機能範疇PredとPP補部に空の代名詞PROが導入され前置詞句タイプの疑似受動文が派生したと仮定する。

(9) [TP Subj_i [T be [_{PredP} t_i [_{Pred} Pred [_{vP} [_{vP} v VP][_{PP} P PRO]]]]]]]

(9)では、動詞と前置詞は融合するのではなく、PPはvPに付加している。主語DPは叙述を表す機能投射Predの指定部に、Pの補部には空の代名詞PROが基底生成し、Pred指定部のDPとの一致より同一指標が付される。(8)の前置詞句動詞タイプの構造では、動詞と前置詞の融合体が目的語のθ役を付与するが、(9)では前置詞の目的語は動詞に支配されていないためθ役は付与されない。このため、動詞の行為や状態の直接対象とはなり得ずインヴォルブメント制約を満たすことはできない。その一方で、主語DPがPred指定部に基底生成することでvPと叙述関係を形成し、主語の属性や特性が叙述され、特徴づけ制約を満たすことができる。

付加部におけるPROのコントロールについては縄田(2006)で提案された分散形態論によるコントロールの一致分析に従う。(10)に示す付加部として現れるPP内のPROに主語と同一指示

の解釈が与えられる仕組みを見てみよう。

- (10) [vP [DP PRONOUN[uCase, u]+JOHN] v [vP leave [PP before [TP PRONOUN[3.sg.m] eating]]]]

(10)では、vP指定部に現れる主語DPは格素性と素性がいずれも値未指定であるため、探査子となりc統御領域を探索し、付加部のPP内にあるPRONOUNを標的として一致が起こる。標的となるPRONOUNは素性の値は指定されているが、格素性を欠いているため空の代名詞PROとして解釈される。一致の結果、主語DPにPROの素性の値がコピーされ、連鎖が形成される。このようにして、主語DPとPROに同一指示の解釈が生じる。(9)の前置詞タイプの疑似受動文の構造でも同様に、Pred指定部にある主語DPは素性と格素性が、どちらも値が未指定であるため探査子となり、C統御領域内を探索し、付加部PP内のPROを標的として一致が起こる。その結果、主語DPにPROの素性の値がコピーされ、連鎖が形成されることで同一指示の解釈を得る。PROは格素性を欠くため、主語DPは主節のTとも一致し、TP指定部へ移動し主格を得る。

以上のように、疑似受動文の通時的観察に基づき、その出現と構造変化を示すことにより、現代英語における統語的意味的特徴を明らかにした。これに以前の課題で扱った中間構文の歴史的発達についての成果を合わせ、今後の研究では tough 構文の歴史的発達について明らかにしていく。まず、古英語の tough 構文について A 移動で派生していたかを検証する。Tanaka(2007)によれば、古英語の不定詞句では to は依然として前置詞であり、to から V に付与される与格語尾-enne は派生接辞から屈折接辞へ変化した。そして、-enne は v*P 指定部を占めるようになり意味役割が付与されていたため、Burzio の一般化に従い、不定詞句の補部 DP は v*から対格が付与されていた。したがって、v*P は外項を持つフェイズであり、フェイズ不可侵条件(PIC)によって tough 構文の補部 DP の移動は阻止されるはずである。Fischer は古英語の tough 構文の不定詞は受け身不定詞であるため DP の抜き出しが可能であると述べているが、形態的に能動不定詞と違いはなく、その根拠は示されていない。古英語の tough 構文では、to は前置詞で-enne 接辞は依然として名詞派生接辞であるとし、前置詞の補部は DP であったと仮定する。したがって、表層の主語はもともと主語であり、PP 内からの移動を必要としないことになる。この仮定についても形容詞に後続する PP を含む通時的データを収集・分析し、to 句とその他の PP の等位接続が可能であるかなど、そのふるまいを検証する。Tanaka(2007)によれば、中英語になると接辞の衰退によって to は P から T へ文法化し、PRO を認可するようになった。C から T への素性継承に従えば、この時点で不定詞は CP となったと考えられる。CP はフェイズであるため、不定詞節内の補部から DP を移動させる A 移動は不可能である。このように、tough 構文における変化には不定詞 to の文法化も関連しており、不定詞自体の発達もあわせて議論していく。

参考文献：Dreschler, Gea. (2015) *Passives and the loss of verb second: A study of syntactic and information-structural factors*, Doctoral dissertation, Radboud niversity Nijmegen.
Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press. 縄田裕幸 (2006) 分散形態論による一致分析, 島根大学教育学部紀要39, pp. 85-99. 高見健一 (1995) 機能的構文論による日英語比較, くるしお出版. Tanaka Tomoyuki (2007) "The Rise of Lexical Subjects in English Infinitives," *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 10, 1, 25-67.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 茨木正志郎 久米祐介 松元洋介 近藤亮一
2. 発表標題 言語変化の要因と過程 形態・統語・意味の観点から
3. 学会等名 日本英文学会関西支部第15回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 久米祐介	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 448
3. 書名 言語の本質を共時的・通時的に探る（執筆部分：英語の疑似受動文の通時的発達と変異, pp.150-161.）	

1. 著者名 久米祐介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 384
3. 書名 語法と理論との接続をめざして 英語の通時的・共時的広がりから考える17の論考（執筆部分：能格動詞 break の史的発達：中間構文に至るまで, pp.169-186.）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------